０１・授業中、耳元でささやかれるだけでスイッチ入っちゃう

とある年の春。
五月十二日。十一時五十分ごろ。
場所は主人公とシーラが通っている学園の、３年Ａ組。
天気は晴れ。気温は二十二度程度。
四時間目。現代文の授業中。

ＳＥ１　教室の外で鳥が鳴く声
【最初から最後まで流す】
【繰り返して流す】
【建物の中から、小さく聞こえる】
【０―５秒ほど流してＳＥ２】
【その後、音量がとても小さくなる】
【場面転換するまで流し続ける】
【トラック終了まで流し続ける】

SE2　梓が黒板に文字を書く音
【最初から最後まで流す】
【小さめの音量で流す】
【かなり遠くで聞こえる】

〈主人公〉
「……」

主人公は今、授業中であるにもかかわらず、すやすやとよく寝ている。
机の上に盛大に突っ伏して、小さく寝息を立てている。
主人公は学生兼経営者。
昨日、大きな仕事を無事に終えた事で、ちょっと気が緩んでいるようだ。

とはいえ、授業中に寝てよいわけではない。
周囲の席に座る親しいものたちは、一人は少々楽しげに、一人ははらはらと。
そして一人は、一見まるで気にしないそぶりで、でも、じっと静かに主人公を見守っている。
果たして主人公は、いつ目を覚ますのか。

その動向に、にわかに注目が集まりつつあった。

このようにお疲れの主人公だが、昨夜も決して早く眠れたわけではない。
来週にはもう次の大切な打ち合わせが迫っており、その準備を始めていたからだ。
次に会うのは、ブランディングデザイナー。
今後主人公の事業を、主にビジュアル面で助けてくれる存在だ。
その人は今をときめく大人気デザイナーで、主人公もファンの一人である。
その上、顔の広い友人の紹介で、運よく会わせてもらえる事になった相手なのだ。
絶対にしくじれない。
その友人――今、主人公の後ろの席に座っている『保科　あまね（ほしな　あまね）』の事だが――のためにも、絶対に満足のいく相談をしたいのだ。
というわけで……その努力のしわ寄せとして、主人公は今眠っているのだった。

そんな主人公を、前述の三人。
まず、後ろにいるあまねはドキドキと、でも少しにやにやしながらこの状態を楽しみ。
右隣に座る『大槻　日菜子（おおつき　ひなこ）』はおろおろ、ひやひやと。
『どうか先生が主人公に気づきませんように……』と祈り。
そして左隣に座る主人公の恋人兼メイド『シーラ・ホワイト』は、何事もなかったかの

ように授業を受けている。
ように見えた。

▲　ボイス加工あり
【2メートルほど離れた位置から聞こえる】
【フェードインする】
●正面　30センチ
〈梓〉
「【授業の題材である、小説について解説している。
クールで淡々とした、だが力強く、落ち着いた声で。
梓は三十歳の『格好いい女性教師』。
黒髪を一つにまとめて眼鏡をかけ、スーツをばりっと着こなした『大人の女』である。
梓は今、作中における『主人公』について解説している。
『彼女』とは『主人公』の想い人で、ヒロインの事。
梓はこの『主人公』を好意的に見ているが、それを授業には反映させない。
あくまで客観的に解説をする】
……つまり主人公には、負けられない理由があった。
何が何でもこの手で彼女を救おうと、意地になっていた訳だな」

〈主人公〉
「……」

主人公、夢の国から梓の声を聞きつけると、小さくピクリと動く。
不真面目なりに、寝ながら授業を聞いているのだ。
なぜなら主人公は、授業に興味がなくて眠っているわけではない。
むしろありにあり、大アリで。
この作品の『主人公』と『彼女』には特別な思い入れを持ち、授業の範疇を越えたレベルで関心を抱いているのである。
……それでも寝てしまうのが、主人公の困ったところなのだが。

▲　ボイス加工あり
【2メートルほど離れた位置から聞こえる】
●正面　30センチ
〈梓〉
「【クールで、落ち着いた声で。
主人公が寝ている事には気づいている。

だが、今のところ授業に支障をきたすほどではないので、放っておいてやっている。
梓は主人公の家庭の事情を知っているので。
『とはいえ、少し甘すぎやしないか』と梓自身思っているが、今のところ大目に見ている】

では、この時の主人公の心情としては、どのようなものが考えられるだろうか。
【一呼吸おいてから。
一度カレンダーを見てから話し出すイメージで】
そうだな……今日は十二日か。
【まったく他意なく、指名する。
主人公の出席番号は十二番。
だが梓は『主人公が寝ているから、意地悪としてわざとあてた』という訳ではない】
よし、出席番号十二番の者。答えてくれ」

しかし、ここで事態は急展開を迎える。
国語教師の『御影　梓（みかげ　あずさ）』が、主人公を指名したのだ。
主人公の周囲……主に右隣に、一気に緊張が走る。

●右　30センチ

〈日菜子〉
「【※息づかいのみ※　で表現する。
小さく息をのむ。
これを梓に悟られないようにしつつ、非常に慌てている。
主人公が指名されてなお、夢の中にいるので】
……！」

★左　ささやき　３０センチ　※マークのセリフまでささやく
「【主人公に話しかけている。
ひそひそと、静かにささやく。
全く慌てず、冷静に。
隣の席で眠っている主人公を起こそうとしている。
授業で当てられたので】
お嬢様」※

★正面　背後　ささやき　３０センチ　※マークのセリフまでささやく
〈あまね〉
「【主人公に話しかけている。

ひそひそとささやく。
だが平然としたトーンで。
この状況を楽しんでいるのを、隠しきれない感じで。
前の席で眠っている主人公を起こそうとしている。
授業で当てられたので】
おーい。起きろー。当てられてるぞー」※

主人公の背中を、あまねの白くぷにぷにとした指が、つんつん、つんつんと優しくつつく。
三人は声で主人公を包み、それぞれの方法で警鐘を鳴らすが、それでも主人公は起きない。
眠りが深いのだ。

●右　３０センチ
〈日菜子〉
「【梓に話しかけている。
自然に切り出そうとしているが、どこかわざとらしくなっている。
主人公を庇おうとして、不自然な態度になっているので。

日菜子はおっとり優しい優等生タイプで、どのような場面でも仲裁役になりがちな『中間管理職系女子。
梓との関係も良い。
そのため、自分が犠牲になってこの場を切り抜けようとしている】
あのぉ、先生。
私、答えたくなってきたかもぉ……」

▲　ボイス加工あり
【2メートルほど離れた位置から聞こえる】
●正面　30センチ
〈梓〉
「【日菜子の言葉に反応している。
きょとんとして。
出席番号十二番のものがすぐに出てこないので。
また、なぜか、無関係の日菜子が答えようとしているので】
ん？」

ここでしびれを切らし、妙な事を言い出したのは日菜子だ。

これには梓もわけがわからず、きょとんと目を見開いている。
だが、この行動はあまりよい結果を生まなかった。
ほんのわずかの間の後。梓はいよいよ『十二番はあいつだったか』と気づき、眠る主人公の頭頂部を見下ろす形になる。
いよいよクラス中の視線が、主人公に注がれた。

SE3　主人公が起き上がる音
【最初から最後まで流す】

〈主人公〉
「……」

●正面　背後　30センチ
〈あまね〉
「【小声で。楽しげに、うきうきした感じで】
あっ起きた」

そんな中、おもむろに主人公が起き上がった。

周囲の様子にはまるで気づきもせず、それでも当てられた事だけは理解して、自分なりの解釈を述べ始める。

〈主人公〉

「つまるところ、主人公は彼女と対等になりたいんです」

主人公、ずいっ、と黒板に書かれた『主人公』の名前を指さすと、そのまま並行に、『彼女』の名がある方へと指を動かす。

どうやらこの動きが『対等』を表現しているらしい。

その姿は、まるで酔っ払いだ。

声は寝ぼけ、手もゆらゆらしているのに目は据わっていて、主張は真剣。

己が今目覚めた事など一切気も留めず、周囲がぎょっとするほど堂々としている。

▲　ボイス加工あり

【2メートルほど離れた位置から聞こえる】

●正面　30センチ

〈梓〉

「【感心して。

これは、完璧な正当とは言えない。
だが、主人公らしい、面白い解釈なので。
しかしそれは『主人公が、キャラクターに感情移入しすぎて、歪んだ解釈をしている』証拠でもある】

ほう？」

だが、梓はこの回答が気に入ったようだ。
最後まで聞いてくれるのか、そのまま続きを促してくれる。
だから酔っ払い……もとい主人公は、一息に自分の意見を語りつくした。

〈主人公〉
「主人公が彼女を解放したいと願う理由は、一つしかありません。
彼女が、今の立場に縛られているからです。
今のままでは、彼女は自分らしい生き方ができません。
主人公に対しても『言いたくても言えない事』『したくてもできない事』が積もり積もっている事でしょう。
主人公はそれをなくしたいのです。
それはむろん、彼女を愛しているから。

だからこの戦いに勝ち、彼女を一人の人間として独立させる事で……。
主人公は彼女を救おうとしているのです。
絶対に負けられないに決まっています」

▲　ボイス加工あり
【2メートルほど離れた位置から聞こえる】
●正面　30センチ
〈梓〉
「【感心して。
主人公の回答は、少々正当から離れてきたものの、やはり主人公らしい面白い解釈なので。
また、主人公なりに予習して、作品を読み込んできた事は間違いない答えなので。
しかしそれは『主人公が、キャラクターに感情移入しすぎて、歪んだ解釈をしている』証拠でもある。
なので梓は『これがテストなら、あまりよい点はあげられないな……』とも思っている。
梓は主人公の弱点を、このような、ものの見方が少々偏っている点だと思っている】
……なるほど」

言い終えると、梓が感心したように息を吐く。
クラスメイト達も、主人公の熱弁に、ぽかんと静まり返る。
その一部は『果たしてそうだろうか……』『この解釈は、本筋から随分それてはいないだろうか……』という顔をしているが、主人公は気にしない。
物語に感情移入しすぎて、自分自身と物語の主人公の境界が、少々あいまいになっているのだ。

▲　ボイス加工あり
【2メートルほど離れた位置から聞こえる】
●正面　30センチ
〈梓〉
「【感心して。
少々正当から離れてきたが、主人公らしい面白い解釈なので。
また、主人公なりに予習して、作品を読み込んできた事は間違いない答えなので。
しかしそれは『主人公が、キャラクターに感情移入しすぎて、歪んだ解釈をしている』証拠でもある。
なので梓は『これがテストなら、あまりよい点はあげられないな……』とも思っている。
梓は主人公の弱点を、このような、ものの見方が少々偏っている点だと思っている】

なかなか面白い答えだ。
完全ではないが、独自の視点がいい。
予習はしっかりしてきたようだな。
ユニークな回答に免じて、夢の世界に居た事は目を瞑（つむ）ってやろう」

〈主人公〉
「……！」

――あっ。

だが、この通り正気を失った主人公も、ここでようやく我に返る。

●正面　背後　３０センチ
〈あまね〉
「【小声でひそひそと。
きゃっきゃと嬉しそうに】
やったっ❤」

……やっちまった。
やば。
と。

●右　３０センチ
〈日菜子〉
「【※息づかいのみ※　で表現する。
大きくため息をつく。
とてもホッとした様子で。
主人公が梓に怒られずに済んだので】
ふう……」

▲　ボイス加工あり
【２メートルほど離れた位置から聞こえる】
●正面　３０センチ
〈梓〉
「【『ふっ』と笑っている感じで。

主人公の席の周囲に座る三人、特に日菜子があわてふためき、助けようとしていた事を理解したので】
友情に感謝するように」

〈主人公〉
「はーい……」

それでも友人たちは安堵し、梓もやたらに楽しげだ。
なので主人公は、ばつが悪そうに返事をすると、そのまますーっと縮こまり。今度は気配を消そうと必死になる。
少しでも、己のやらかしをなかった事にしたいのだ。
むろん、土台無理な話なのだが……。
こうして主人公が、

……はぁ。
やっちゃったな。
これじゃあ、『主人公』の心情じゃなくて、今のわたしの気持ちじゃん。
これからの授業で挽回しないと……。

と、どうにか小さくなろうとしていると、ふと左隣のシーラがこちらを見た。
彼女は、一連の騒動にはほぼ関わっていなかった。
なのに、ここでふいに近づいてきて……。
目が合うなりこう言って、主人公を惑わせてくる。

★左　ささやき　0センチ　※マークのセリフまでささやく
「【ひそひそと、そっと、優しく。
だけど少しセクシーな感じで。
主人公と聞き手に、今後のえっちな展開を期待させるような感じで】
命拾いしましたね」※

〈主人公〉
「……っ……❤」

その、たった数秒の短い一言だけで、主人公の心臓はめちゃくちゃにかき乱される。
命拾いしたばかりのはずなのに、再び危機に陥る。
授業中に堂々と眠りこけた後、独自の解釈を唱える程神経が太いのに、恋人にはめっぽ

う弱いのだ。
そして、これまでに起きた色々な事を思い出したり。
はたまた、これから起きるかもしれない様々な事を期待したりして……。
とても口には出せないような、とても授業中に空想すべきではないような事を考えてしまうのだった。

一度フェードアウトする。

SE4　昼休みの廊下の喧騒
【最初から最後まで流す】
【繰り返して流す】
【0―5秒ほど流してSE5】
【その後、音量が小さくなる】
【トラック終了まで流し続ける】

SE5　あまねと日菜子の足音
【最初から最後まで流す】
【繰り返して流す】

【0―5秒ほど流して『あまね』のセリフ】
【その後、音量が小さくなる】
【▲1　で一度ストップする】
【▲2　で再開する】
【その後、5秒ほど流してフェードアウトする】

SE6　主人公とシーラの足音
【最初から最後まで流す】
【繰り返して流す】
【0―5秒ほど流して『あまね』のセリフ】
【その後、音量が小さくなる】
【▲1　ストップする】

数十分後。
授業が終わり、昼休みの廊下。
主人公、シーラ、あまね、日菜子の四人は、昼食を取るべく移動している。
いつも四人でお昼ご飯スポットとして利用している、講義室へ向かっているのだ。

●正面　３０センチ
〈あまね〉
「【あっけらかんと楽しそうに。
特に誰に話しかけているでもなく、ひとりごとのような感じで。
先ほどの授業の一件について話している。
あまねは基本的に『面白ければよし』『終わり良ければすべてよし』というタイプである】
あ～。
さっきの面白かったぁ❤」

●正面　３０センチ
〈日菜子〉
「【あまねに話しかけている。
穏やかで優しい口調ではあるが『寿命が縮まったよ』と、少々呆れながら、ぷんぷんかわいく怒っている感じで。
日菜子は、自分に無関係の事でも、まるで自分自身の事かのようにドキドキハラハラしてしまうタイプである】
もぉ。『面白かったぁ』じゃないよぉ。
こっちはほんとにドキドキしたんだから」

●正面　３０センチ
「【三人の会話を微笑みながら聞いている。
上品に小さく笑う】
ふふふ」

ここで話題になるのは、やはり先ほどの主人公の行動だ。
何事も面白がるタイプのあまねはきゃっきゃと笑っているが、日菜子はすっかり疲れ切っている。
相当な負担をかけてしまったらしい。

〈主人公〉
「いやいや、ほんとにすみませんで……」

主人公はそんな三人にぺこりと頭を下げ、先ほどの失態を詫びる。
すると、

●正面　３０センチ

「【主人公に話しかけている。
穏やかに優しく。
※嫌味っぽく聞こえないようにお願いします※】
無事に答えられて良かったですね」

またもシーラが、こんな事を言って意味深に微笑んでくる。

〈主人公〉
「っ……」

だが、シーラには、おそらく他意はない。
単に先ほどの件について感想を述べているだけだ。
それだけでも今の主人公には、彼女の一挙一動が、いやに意味ありげなものに見えてしまう。

〈主人公〉
「はい……」

……ここまで来ると、さすがの主人公もそろそろ自覚してくる。

――これはおそらく、原因はシーラじゃなくて……。

と。

だが、ここで『……』の先に続く事実を、素直に認め、甘えられないのが主人公だ。
主人公はいよいよ己の事を棚に上げると、脳内で諸々をシーラのせいにし始めた。

――ていうか、さっきからなんなんですかねこのシーラは。
なんか授業中から、ちらちら、ちらちらってわたしの事見てきてさぁ。
いや、恋人兼メイド兼ボディガードなんだから、見るのは当たり前なんだけど。
それでもなんか変な目っていうかさ、なんかやらしい感じで見てきてる気がするんだよね。シーラが……シーラが。
シー、ラ、が。
そんなんだから。
わたしも、ちょっと気になるっていうか、いうか……。

などと、延々言い訳しながら、足のあたりを少々もぞもぞと恥ずかしそうに動かしながら歩いて行く。
その間にも会話は進み、四人は目的地に近づいていた。

●正面　３０センチ
〈あまね〉
「【シーラに話しかけている。
同意の『ねーっ』】
ねーっ。
【主人公に話しかけている。
きゃっきゃと嬉しそうに。
主人公の今日の予定について述べる。
『今日は大きな仕事が片付いたお祝いとして、シーラとホテルに宿泊する予定なんでしょう？』という意味で言っている。
あまねはシーラの事を『しいちゃん』と呼ぶ】
今日はおっきいお仕事が終わったお祝いに、ホテルでしいちゃんとお泊まりなんでしょ？
ずーっと忙しかったもんねぇ。お疲れ様～❤

【ここでハッと気づいて。
『篠田さん』とは、今度主人公の仕事相手になる女性で、あまねの知人『篠田　恭子（しのだ　きょうこ）』の事。
あまねが紹介した事で、主人公は恭子と仕事できる事になったので】
でも、来週は篠田（しのだ）さんとの打ち合わせ始まるんだっけ。
【とても心配した様子で。
いくらなんでも、主人公はハードスケジュール気味なので】
社長は大変だぁ……」

〈主人公〉
「まぁ、おっしゃる通りで……。
でも、頑張るよ。
あまねに紹介してもらったわけだし。絶対成功させたいからね」

●正面　30センチ
〈あまね〉
「【主人公に話しかけている。
きゃっきゃと楽しげに。

『よろしくね』を特にかわいく。
あまねは『緊張』の概念を知らない大物タイプで、とにかく物おじしない性格である。
また、恭子に対しても『人気デザイナーの篠田恭子』ではなく『昔からよくしてもらっているお姉さん』のように捉えている。
なので、少々主人公の心情を理解できていないところがある。
『よろしくね』とは『主人公とのお仕事に、どうか前向きに、優先的に取り組んで下さい❤』という意味で言っている。
しかし、特に強制力はなく、やはり『昔からよくしてもらっているお姉さんに、ちょっとお願いする』程度の意味しかない】
えぇ〜？　そんなに心配しなくても大丈夫だよぉ。
篠田さん優しいし、あまねからも一杯『よろしくね』ってしとくからぁ❤」

〈主人公〉
「あまねはそう言うけどさぁ……。
篠田さん、ほんとすごい人だし……」

主人公、恭子の話題になった事で一気に現実に引き戻され、制服の胸あたりを握って『うう……』と胃をキリキリさせ始める。

恭子は実際温厚な人物として知られており、あまねの力添えもある以上、事故が起きる可能性は極めて低い。
だが、可能性が低いとしても、それはゼロではない。
小心者で慎重派の主人公は、念には念を重ねたいと思っているのである。

●正面　３０センチ
〈日菜子〉
「【主人公に話しかけている。
優しく主人公をフォローする。
授業では眠ってしまったものの、きちんと予習してきた主人公の努力を称えたいので。
日菜子は正直、主人公の解釈は『ちょっと独自すぎる』と思っている。
だが梓と同じように『作品をしっかり読んでいないと、出てこない解釈だ』とは思っているので】
でも、準備で忙しかったにしては、ちゃんと答えられてたよね？」

そんな主人公に、日菜子がフォローを入れる。
先ほどまでたっぷり心配をかけたのに、大槻日菜子という女性は、とにかく人間ができている。

●正面　３０センチ
〈あまね〉
「【全員に話しかけている。
また、日菜子の言葉に同意して。
きゃっきゃと楽しげに】
そう！
【ちょっと格好つけて『キリッ』とした感じで。
※『※マーク』まで、先ほどの主人公の回答を、要旨を押さえてそらんじる※。
あまねはこのように一見フワフワしているが、記憶力も頭も非常によい。
スポーツ以外のスペックはすべからく高水準と言ってよい女性である。
なので、ヘラヘラ、ふにゃふにゃとしていても、周囲からさりげなく一目置かれている存在となっている】
『つまるところ、主人公は彼女と対等になりたいんです』
『主人公は彼女を、彼女を縛り付けるものから解放したいと思っています』
『そうする事で、彼女は救われ、一人の人間として独立する事ができます』
『その時二人は、真に対等になれるのです』　※
【元の口調に戻って。

きゃっきゃと楽しげに】
だって～！　かっこい～❤」

〈主人公〉
「あはははは……完コピどうも……」

対するあまねは、どこまでも自由である。
何がかっこいいのか、こんなのただのとんちき回答ではないかと主人公は思うが、あまねにそう言われてしまえば、もはや苦笑いを浮かべるしかなかった。

●正面　３０センチ
〈日菜子〉
「【あまねに話しかけている。
少々疲れた様子で、ちょっと呆れて、かわいく怒る。
先ほどの授業の件で、日菜子は相当気をもんだので】
もう。あまねは暢気（のんき）なんだから。
私はそれどころじゃなかったよ。
【ため息まじりにぐったりと。

思い出すだけで、なんだかぐったりしてしまうので】
何（なん）て答えるのか、ハラハラしちゃって……。
何（なん）だかすっごく、お腹が減っちゃった」

●正面　３０センチ
〈あまね〉
「【日菜子に話しかけている。
きゃっきゃと楽しげに。
あまねは日菜子の事を『ひなちゃん』と呼ぶ。
明るい話題に切り替えようと、昼食のメニューについて尋ねる。
また『今日は購買で昼食を買う日だよね？』と確認している】
あははっ❤
じゃあひなちゃん、今日お昼何（なん）にする～？
今日は購買の日だよね❤」

と、ここで話題が切り替わった。
四人はいつも一緒に昼食をとっているが、どこでとるか、何を食べるかは日によってまちまちである。

学食にいくにしろ購買にいくにしろ、講義室でお弁当を食べるにしろ。ルートは途中まで同じだ。なので、ここまでなんとなく歩いて来ていたが……。

そう言えば今日はバタバタしていて、各自の希望を聞いていなかった。

●正面　３０センチ

〈日菜子〉

「【少々呆れつつも、気を取り直す。

明るく落ち着いた声で。

いつまでも引きずっていては、マイペースなあまねにはついていけないと、わかっているので】

うん。今日はパンの気分かな」

●正面　３０センチ

〈あまね〉

「【日菜子に話しかけている。

明るく楽しげに】

おっけ～❤

【主人公とシーラに話しかけている。

一呼吸おいて。
振り返ってから話し始めるイメージで。
『答えはおおむね予想がつくが、念のため聞こう』という感じで。
『そっち二人』とは、『主人公とシーラ』の事】
そっち二人は……」

〈主人公〉
「あ。わたし達は、お弁当。シーラと席取って待ってるよ」

とはいっても倹約派の主人公とシーラは、毎日同じ選択肢だ。
主人公が答えると、シーラも微笑み、小さく手を上げて手提げかばんを見せる。
そこには、主人公とシーラの昼食セットが入っているのだ。

●正面　３０センチ
「【あまねに話しかけている。
穏やかに、丁寧に答える】
はい。
私（わたくし）とお嬢様はお弁当がありますから、先にいつもの教室でお待ちしており

ます」

この手提げを、なぜかシーラは絶対に持ちたがる。
中にあるのは自分の持ち物なのだから、主人公は自分で持ちたいと思っているのだが、そうさせてくれないのだ。
主人公には、シーラのこだわりはよくわからない。
シーラは確かに主人公に仕えるメイドでありボディガードだが、正直その役目は少しずつ形骸化している。
主人公の家は昔こそ立派だったものの、今やすっかり落ちぶれ、大した権威はない。
使用人もずいぶんいなくなってしまい、今残ってくれているのは、シーラを始めとする、義理堅く人間のできたごく少数だけなのだ。
つまり主人公は、名家の娘だからと言って、すでにそこまで敬うような存在ではない。
むしろ『将来を見据えて自立頑張れ』『お嬢様根性を捨てろ』と言われる存在なのである。
だからシーラは甘やかさず、自分の荷物くらい自分で持たせるようにすればいい。
少なくとも、主人公はそう思っているのだが……シーラはそうではないらしい。
おかしなところで、線を引きたがる。

●正面　30センチ

〈あまね〉
「【主人公とシーラに話しかけている。
明るく楽しげに。『そうだと思った❤』という感じで】
だよね❤
じゃ、あまね達買って来るから、待っててね♪
【シーラに話しかけている。
きゃっきゃと楽しげに】
しいちゃん。今日はお弁当何（なに）作ってくれたの～？」

●正面　３０センチ
「【あまねに話しかけている。
穏やかに丁寧に。
メイドらしい口調のまま、主人公をいじる】
本日は低カロリー食を意識致しました。
お嬢様は現在、少々体重が気になるとの事でしたので」

〈主人公〉
「ちょっちょっちょっちょ。言わんでよろしい」

●正面　３０センチ
〈あまね〉
「【主人公とシーラに話しかけている。
とても楽しそうに笑う。
あまねは、主人公が名家のお嬢様であるにもかかわらず、庶民的で地に足がついた、堅実な人柄と暮らしぶりをしている事を、とても好ましく思っているので】
あはははっ❤　おもしろ～❤」

手提げを覗き込むあまねに、シーラが答える。
主人公が慌ててつっこみを入れると、あまねがこれは愉快と言った様子ではしゃぐ。
それを日菜子が笑って見ている。
四人の日常はいつもこのように流れていき、それは卒業まで変わらない事に思える。
だからこそ主人公は思う。

……シーラってばさ。
こういう風にちょいちょいイヤミ言ったりからかってきたりして。
それ以外も、ちょっとっていうか相当生意気で。

いつも『だいたい対等』みたいな態度のくせに。
『メイドである事』だけは変えようとしないんだよなぁ。
……よくわかんないよ、シーラさんの事は。

と。

●正面　３０センチ
〈あまね〉
「【主人公とシーラに話しかけている。
無邪気にうきうきと、嬉しそうに。
とてもよい意味で言っている。
あまねは、二人のそう言ったところが好きなので。
※嫌味っぽく聞こえないようにお願いします※】
ほんと二人って～♪
すごい家の人なのに、すごい家の人に見えな～い♪」

●正面　３０センチ
〈日菜子〉

「【あまねに同意して】
ふふ。
【主人公とシーラの良さについて述べる。
日菜子もあまねと同意見なので。
日菜子もかなり立派な家のお嬢様なのだが、主人公の家の方がよっぽど格上だと捉えている。
なので、謙遜して言う】
それが素敵な所だよね。
そのお陰で、こんなに仲良くしてもらえてるんだし」

●正面　３０センチ
〈あまね〉
「【日菜子に同意して】
そうだね～！
【にやにやと嬉しそうに。
特に『敬語で話せ無礼者ぉ～』の部分をおどけた感じで。
『主人公の人柄からして、絶対にこんな事は言わないだろう』とわかった上で言っている】

ほんとだったら『敬語で話せ無礼者ぉ～』とか言われてるかも～！」

〈主人公〉
「言わないし！
だいたい。あまねと日菜子の方がずっとお嬢様でしょうが」

●正面　３０センチ
〈あまね〉
「【主人公に話しかけている。
主人公の言葉に同意しているというよりは、主人公の反応が可愛らしくて、面白くて笑っている】
あはははっ❤」

▲１　ここでＳＥ５が一度ストップする。ＳＥ６はストップする。

と、ここで講義室に到着した。
四人は一度立ち止まると、一度二手に分かれる事となる。

●正面　３０センチ
〈あまね〉
「【主人公とシーラに話しかけている。
講義室に到着し、一旦二手に分かれるので】
じゃあ、行ってくるね♪」

●正面　３０センチ
〈日菜子〉
「【主人公とシーラに話しかけている。
穏やかに優しく。
一旦別れて、購買に向かう事を告げる】
先に食べてていいからね」

●正面　３０センチ
「【あまねと日菜子に話しかけている。
にこやかに、穏やかに】
承知致しました。
行ってらっしゃいませ」

〈主人公〉
「いってら～」

こうして主人公とシーラは、あまねと日菜子を見送る。
あまねたちはだんだん遠ざかり、主人公とシーラは一旦二人きりとなる。
講義室の中には、おそらく誰もいない。
だが、だからと言って、ここは学校で、今は昼休みだ。
当然、何かが起きるはずはないのだが……。
どうしてだろうか。
主人公の期待は、おのずと高まっていく。

▲2　ここでSE5が再開する。だんだん遠ざかっていき、フェードアウトする。
ここでフェードアウトして終了。